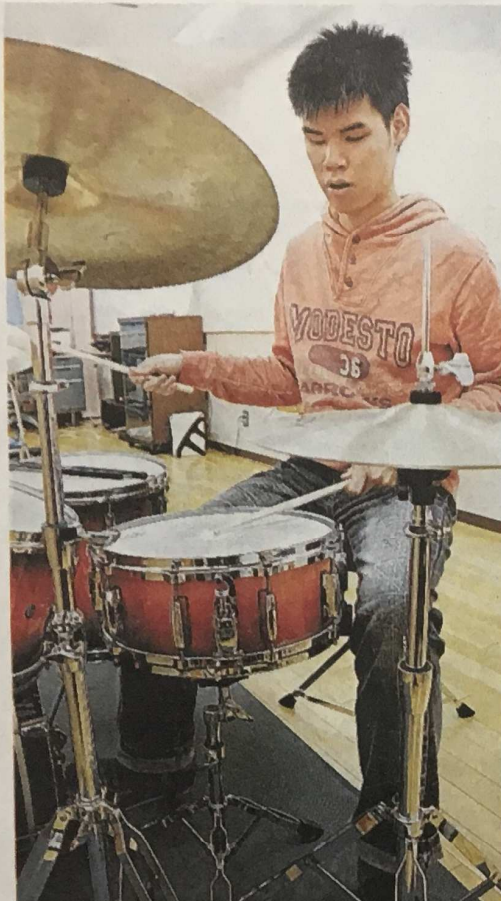


# 心で刻むジャズドラム



練習でドラムをたたく中村幸太郎さん＝名古屋市中村区稲葉地町

生まれつき目が見えない中村幸太郎さん(22)は名古屋市南区に生まれ、名古屋音楽大学(同市中村区)を卒業する。小学生でジャズにのめり込み、クラブで、サークルでドラムをたたき続けてきた。卒業後、夢だったプロドラマーへの挑戦を本格的に始める。

ワン、トゥー、スリー……。中村さんの合図で演奏が始まった。大学であった仲間4人との約2時間にわたる練習。中村さんはスティックやブラシでリズムを刻み続けた。

中村さんは入学して、ジャズサークルに入って以来、地域の音楽イベントや、大学が主催するコンサートなど2カ月に1回は舞台上に立ってきた。名古屋・金山や覚王山のライブハウスで演奏したこともある。「アドリブが中心のジャズは共演者との会話のようなもので、とても楽しい」と話す。

部員たちによると、中村さんはドラムセットの運搬こそできないが、演奏では何の支障も感じないという。サクソ

フォンの坂井彰太郎さん(21)は「あえて言えば曲の終わりをそろえるタイミングを幸太郎先輩に合わせるようにしている。いつもテンポがぶれない演奏をしてくれて頼もしい」と言う。

中村さんは目の網膜に傷があり、光を感じるだけ。障害者1級の認定を受け、小学校は盲学校と一般の学校の両方に通った。普段は白杖(はくじょう)を使い、電車やバスの移動では、携帯電話による音声案内も使っている。

ジャズと出会ったのは小学校5年生の時。自宅近くの中学校であったクリスマスコンサートでの演奏を聴き、好きになった。中学では、ジャズ部に入り、パートにドラムを選ん

## 全盲の名古屋音大生 プロめざし修業中

だ。ジャズ部がなかった高校では、吹奏楽部に入り、パーカッションを担当した。「アドリブ表現が中心のジャズドラムを学びたい」との思いから名古屋音大へ進み、音楽学科でジャズドラムを専攻した。

テキストは点字にされた曲の楽譜を使い、それ以外はCDを繰り返し聴いて耳で覚えた。17、18人編成で演奏する時は指揮者の手の動きが見えないため、曲の終わるタイミングは感覚で体得した。直接、指導をしている同大講師の黒田和良さん(44)がドラムをたたいてみせ、少し遅れて中村さんが続く。そんなレッスンを繰り返してきた。

将来はスタジオミュージシャンかバンドのメンバーとして全国を演奏して回るのが夢だ。中村さんの実力について黒田さんは、「曲を覚えるのが抜群に早く、腕は学生の中では全国的にも上位。ただプロとしてはまだまだ」とみる。

卒業後1年間は研究生として籍を置きながら指導を受ける予定だ。「ボリュームコントロールと音色の調整に磨きをかけたい。自分には音楽以外に何もなく、音楽はもう人生の一部なのでぜひプロになりたい」と意気込んでいる。

(三上元)